

氏 名 (本 籍)	なみ がた つよし 波 瀧 剛 (茨 城 県)	
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)	
学 位 記 番 号	博 甲 第 2744 号	
学位授与年月日	平成 14 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
審 査 研 究 科	文芸・言語研究科	
学 位 論 文 題 目	アヴァンギャルドの新天地 —昭和期文学・芸術運動にみる越境の政治学—	
主 査	筑波大学教授	名 波 弘 彰
副 査	筑波大学教授	博士 (文学) 荒 木 正 純
副 査	筑波大学教授	池 内 輝 雄
副 査	筑波大学教授	博士 (文学) 阿 部 軍 治
副 査	筑波大学助教授	博士 (文学) 宮 本 陽 一 郎

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は日本の文学・芸術運動におけるアヴァンギャルドの成立と展開について、西欧ならびに東アジアとの文化交流に重点をおいて考察したものである。

著者が課題と目的を上記のごとく設定したのは、従来の研究が日本のアヴァンギャルドを西欧のアヴァンギャルドの模倣として捉えていることへの悲観からである。それは、第一に、西欧と日本とのあいだの文化的・政治的葛藤そのものが日本のアヴァンギャルドの生成に果たした役割が、従来の研究においては過小評価されているということへの批判である。それにまた第二の批判としては、西欧対日本という関係性が特権化された結果、日本対アジアの関係が実質的に考察領域が除外されてしまうという点にもあった。その批判を課題として考察したものである。

本論文は構成を二部に分けて考察している。各章の構成は以下の通りである。

第一部 交錯する前衛—vanguardとavantgarde—

第一章 「前衛」と「アヴァンギャルド」との遭遇——一九三〇年の文芸・映画批評——

第二章 「アヴァンギャルド」の大陸進出—戦時下のシュルレアリスム—

第三章 復員者の情熱—岡本太郎 第一画文集『アヴァンギャルド』—

第四章 砂漠の中へ—花田清輝と「アヴァンギャルド」—

第二部 抵抗の美学と植民地主義

第五章 ダダイスムの終焉—ソウル・ダダと高橋新吉—

第六章 モダニストの大陸文学—伊藤整『満州の朝』とD・H・ロレンス—

第七章 故郷を創造する引揚者—安部公房とシュルレアリスム—

第八章 高度成長期のアヴァンギャルド—安部公房と『砂の女』—

補論 北進の記憶—漱石の満韓旅行記と『東京朝日新聞』—

第一部「交錯する前衛—vanguardとavantgarde—」では、アヴァンギャルドの概念がジャンルを越境してゆく過程が考察されている。日本においてその概念が文化的越境性を見せ始めるのは1920年代末から1930年代の始め

にかけてであったとし、それに関する考察を行っている。すなわち、第一章では、前衛映画の移入とそれともなう映画批評や文学批評の変容を文化的越境という観点から考察している。とりわけ著者が注目したのは、ジャンル越境者としての飯島正と峰岸義一という映画批評家と美術批評家の評論である。その考察を通して、プロレタリア文学・芸術運動が理念化した「前衛」性に揺らぎが生じたことを明らかにしている。第二章では、美術批評に場を移して、1930年代後半に「アヴァンギャルド」を標榜する芸術家・写真家の団体が急激に出現した現象の分析を行っている。そこには日本におけるシュルレアリスムの普及との関連が考えられるとしている。その点で問題となるのは、シュルレアリスムと「アヴァンギャルド」という名称が結びつく必然性はどこにあるのかということであるとし、その問題を第一章の延長線上にある課題として考察している。その考察過程において、1941年におけるシュルレアリストの弾圧事件に関しても言及し、新たな見解を提示している。

第一部の後半は、画家岡本太郎と評論家花田清輝がそれぞれに刊行した同名の著者『アヴァンギャルド芸術』の特質性と差異性の問題を取り上げて考察している。二人はともに戦後アヴァンギャルドの拠点、「夜の会」の指導者として知られている。第三章では、岡本太郎の画文集『アヴァンギャルド』（1948年）を対象とする。同著はのちの著書『アヴァンギャルド芸術』を生む原型として考えられているが、著者はむしろ、理論、詩、小説、絵画、回想録が混在するなかにアヴァンギャルド概念の多様性を見て取ろうとしている。そして、この多様性をテキストの外部と結びつけることで、戦後復興期におけるアヴァンギャルドの性質を浮かび上がらせようとしている。第四章においては、花田清輝のアヴァンギャルドに対する評論を考察することで、アヴァンギャルドの政治性と芸術性を切り離せない戦略的言説と捉え、大衆の政治運動と芸術創作の特質性を見いだそうとしていると結論づけている。その考察を相対化する上で、著者は第三章の岡本太郎のアヴァンギャルドを比較対象とし、戦後の文化の先駆者として自らを位置づけようとする政治的戦略性をとらえることで、両者の政治的しせいの違いばかりでなく、共有する部分を明らかにしている。

また、第二部「抵抗の美学と植民地主義」では、アヴァンギャルドの領域を文学に絞って、従来、ダダリスト、シュルレアリスト、あるいはモダニストとして知られる作家たちの1920年から40年代にかけての奇跡を考察し、彼らがアヴァンギャルド芸術運動の「前衛」を地政学的に捉えかえして実践していたことをあきらかにしている。すなわち第五章では、高橋新吉の1924年における朝鮮旅行が、半島におけるソウル・ダダ出現の契機となったこと、また第六章では、「大陸開拓文芸懇話会」という国策団体の一員として満州を視察した作家伊藤整を対象にして、彼の旅行記『満州の朝』と翌年に翻訳したロレンスの『メキシコの朝』における植民地主義的言説とを比較することで「前衛」が内包する地政学前衛への積極的関与のあり用をとらえている。第七章および第八章では、安部公房の文学作品を取り上げて、彼が引揚者の作家として出発した戦後復興期から、純文学作家としての地位を確立する高度成長期への変遷を追っている。西欧から強い影響を受けた作家たちにとって、東アジア文化との接触がいかに重要な問題を提起していたのか、昭和文学研究において問題化されつつある課題に取り組み、戦中・戦後に文学営為をおこなった作家のモチーフが作家の経歴にもとづくことを検証している。

なお、昭和期という時代的制約を設けたため、本論文の問題意識を共有するものの、日本における植民地文学の先駆けとなった漱石の『満韓ところどころ』に関する補論を付け加えている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、1930年代の日本の文学を一国の文学史の見直しとして考察を進めるというよりも、それを「アヴァンギャルド」芸術運動との結びつき、さらには近現代の政治・文化状況との関連において捉えることで、その文学がいかに日本の戦後の文化構築に多大の役割を果たしたかという観点から解明したものであり、また芸術家・文学者・評論家などが「アヴァンギャルド」芸術運動をどのように受容し、そしてその運動を満州および朝鮮への植民地主義的拡張と結びつけて半島・大陸にどのように伝播させていったかという点をも明らかにしたものであ

る。以上の点において、高く評価できる論文となっている。

文学を「アヴァンギャルド」芸術運動と結び付けた問題設定のもとに論述を進めて行く中で、飯島正や岡本太郎の創作をはじめとして、これまで文学と芸術の両領域において看過されてきた脱領域的なテキストを、各章で再発見・再評価した功績も評価に値する。したがって各章において取り上げられている題材には、従来の文学史・芸術史の中でよく見られるようなものが一つとしてなく、かつそれが奇をてらったものにならず、全体の構想の中で著者の目指す目的を達成している点は、本論文の視座の有効性を十分に証明している。

とりわけ、安部公房の作品論における「アヴァンギャルド」と引き揚げ体験の関連を考察した第七章と第八章は、彼の経歴と文学に係わる素朴な疑問から出発して、戦後の文化構築に先導的役割を果たした安部公房という人物の秘密にまで迫ろうとするスケールの大きなものである。この二章における論考だけを取り出しても、博士論文として十分に通用するものと評価できる。その達成は本論文全体をつらぬいている著者の問題意識と視座の斬新さによるものであり、それが作品分析に鋭さとスケールを与えていると考える。それによって先行研究の中では望み得なかった厚みと奥行きのある議論が展開されている。その点からも、カルチュラル・スタディーズの示す方向性にも開かれた文学研究として、著者の問題意識と視座が明確な成果に到達していると評価される。

ただあえて欠点を指摘すれば、脱領域的・学際的研究を指向しながら、分析が文字テキストに終始している点が惜まれる。芸術と文学の相関を問う脱領域の研究である以上、例えば岡本太郎の画文集を論じた第三章で、絵画と文章との相関性を絵画資料の分析の側面から論じたり、あるいは岡本太郎の絵画・彫刻についての再解釈にまで論述を広げることができれば、本論文の意義はさらに高められたに違いない。しかし、これらの課題はむしろ著者の今後の研究への期待とするべきだと考える。

以上を総括して言えば、絵画・写真といった視覚表象に関する分析に若干の物足りなさがあることは否めないとしても、文字テキストの分析による脱領域的研究に絞った本論文の達成は、関連の学界に今後新たな領域を開く可能性に満ちていると判断される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。